

第 48 回 歴史リレー講座「松永久秀と大和武士」 天野 忠幸氏 (H30.9.16)

戦国時代の信貴山城主、松永久秀（弾正）と聞けば、主君織田信長に背いたうえ、東大寺大仏殿を焼き払った「極悪人」の印象が強いのではないのでしょうか。事実、ドラマや小説などでは、悪行三昧のほかにも茶器を道連れに最期を遂げた武士として描かれますが、久秀を長年研究する私としては残念な限りです。今回は久秀と大和武士とのかかわり、さらに極悪人のレッテルの下に隠された久秀の実像に迫ります。

「極悪人久秀」が初めて登場する書物が、豊臣秀吉の出世を描いた『太閤さま軍記のうち』（1610 年頃）。同書によると、久秀は主君三好長慶の信頼があつく政治外交を任されていたが、いつしか野望をたぎらせ、長慶を毒殺したうえ自分こそが天下の主と公言します。その後、織田信長が台頭するやいなや彼に取り入り、大和の国の半分を賜ったものの、またも主君に背きます。最終的には大仏殿を焼き払った（1567 年）報いとして、奇しくも 10 年後の同月同日、信貴山城で滅亡したとされます。

しかし、考えてみれば久秀が活躍したのは 1540～70 年代であり、同書が書かれたのはその 40 年も後のことで、内容がすべて事実とは考えにくい。後には江戸幕府によって「主君に背けば久秀のように天罰が下る」と人々の心に恐怖を植え付けることが目的だったと思われる。格好の材料にされてしまった久秀の人物像を明らかにするには、戦国時代の史料を偏りなく調べる必要があります。

例えば、三好長慶の息子義興の毒殺説について、戦国時代の軍記『足利季世記』などは久秀による犯行に懐疑的です。義興は祈祷や名医の治療もむなしく、22 歳の若さで亡くなりました。その際、『柳生文書』では久秀は嘆き悲しんだとあります。また、將軍足利義輝の殺害に関わったと言われますが、その頃彼はすでに家督を息子に譲った後で奈良にいましたし、むしろ殺害に反対の立場だったので、この説は成り立ちません。

そして、主君の三好長慶亡きあと家臣を纏めきれなくなった三好家は混乱を極め、三好三人衆と松永側との間で争いが勃発します。その際の大仏殿焼討について、興福寺の僧が綴った『多聞院日記』には「合戦で放たれた火が大仏殿まで燃え広がり焼け落ちた」とあります。他の文書をあたって、現在常識とされる久秀犯行説を唱えるものは半分くらいで確証はありません。また、久秀は大仏再興に尽力する僧を励ましてさえます。

久秀の政治外交の腕は後奈良天皇にも認められるほどで、頭角を現してから結城忠正や清原枝賢しげかたといった有能な家臣たちに恵まれました。その中でも、久秀の右腕となった人物が戦国時代最強の剣術遣い柳生宗厳むねよしです。久秀と柳生家の交わりは深く、『柳生文書』には久秀や息子の久通による発給文書が数多く残っています。久秀は苦しい戦いでもしんがり奮闘する宗厳を褒め称えました。宗厳としても、元の主君である筒井順慶の圧迫から逃れるためには久秀の庇護が必要でした。久秀に譜代家臣がいなかったことも、宗厳にとっては出世のまたとないチャンスだったはずで。

やがて久秀の弱体化に反比例するかのようにな宗厳の名は尾張の織田信長にまで届き、直接関係を結ぶまでになります。しかし、柳生氏が力をつけたのも、久秀から目をかけられたお蔭ではないのでしょうか。天正元年（1573）、ついに久秀は多聞山城を信長に明け渡し、宗厳は徳川家康に謁見するまで 20 年もの間閑居を続けることになりました。

一個人としての久秀は妻を深く愛し、病床の母を何かと気遣う家庭人でもありました。亡妻を弔うために寺まで建立しています。もともと摂津国の出身で由緒正しき家柄でもない、実力だけが武器のいわゆる成り上がりという境遇のため、家族や家臣を大事にしました。同時に、平蜘蛛の釜を叩き割って自害する逸話を

残したほどの茶人でもあり、江戸時代になるとその生きざまは「見習うべき茶人」として、茶会での『茶窓^{かんわ}閒話』
(1804年)に採用されたほどです。みなさまにはこの講座を機会に、極悪人一辺倒に伝えられる久秀の穏やかな側面、文化人としての素顔にも目を向けていただきたいと思います。